

書評

原口剛・稲田七海・白波瀬達也・平川隆啓
『釜ヶ崎のススメ』洛北出版, 2011
——「無性の都市」のための、釜ヶ崎のよみあるき——

全 ウンファイ

本書は理論のために書かれた本ではない。欧米の最新理論をもって日本における適用の普遍性と特殊性を明らかにしているわけではない。特定の研究領域における根深い議論の集積をめぐる動向をまとめているわけでもない。この本は編者たちが巻末に記しているように研究者による「入門書」なのだ。なんのための入門書かというところももちろんタイトルのとおりその対象は「釜ヶ崎」になるわけだが、拙稿ではこの地名かつ場所を知ることが何を意味しているかを、都市と文化と研究という大きな3本の柱を中心に問うていきたい。様々な方々の長年・多義にわたる実践と研究成果と「おもい」に満ちた本書を、筆者のようなあくまでも素人のよそ者が解説するには浅くとも身近な理論的知見に頼らなくてはならなかった故に。

ひとまず「釜ヶ崎（以下、釜と記す）」という地名について踏まえておかなければならないだろう。主に大阪環状線と南海本線が交差する東南側の三角地帯を指すこの地名は、行政上の死語になっているにもかかわらず未だに通用する。この名に加え「にしなり」や「あいりん」という別の名称がまた使われている。しかし諸地名は何一つ昔ながらの集落の営みからなるものではなく、行政の便宜上によって登場したことに注意する必要がある（序章）。明治期以後、大阪市の近代化・工業化とともにスラムの解体（長町の本賃宿街）が行われ、新たな都市周辺のスラムとして形成されたことや（第4章）、スラム特有の人口構成が戦後の高度成長期に対応し寄せ場のまちへ変わったこと（第5・6章）、そして釜ヶ崎に留まる人口構成が大きく変化する90年代以後の状況（第8・10章）まで、その時間軸を貫く一つの共通項は都市構造の変化、言い換えると近代化の社会・空間的な進展である。

大阪市の第2次市域拡張（1925）当時の立地からも明らかであるように、釜ヶ崎には墓地や刑場などが既に隣接していた（第4章）。市域拡張はこの地域を大大阪の暗部を抱えたインナーリングとして再編させた。そのようにして一つの場所に溜まった流動する細民たちは、高

度成長期の間、安定した雇用の保証を基本とする標準世帯となって根付くことなく、港湾労働や建設労働などの不安定労働で働きながら単身世帯となってこのまちを形づけている（第5章・第10章）。それを認知的な経験として我々に伝えるのがこの地の風景である。日々環状線に乗って、もしくは関西空港からの帰り道で見つめたり飛ばしていったりするその風景は、いまは「ビジネスホテル」と書かれたビル群がまず目に入るが、昔はそうではなかった。まちの風景は様々な世代が居住していた土の上のトタン屋根の長屋から（コラム「トタン」）、全国から流れてくる不安定労働者を包む簡宿やがて福祉アパートへと質・量的に変化していった。第3章およびありむらによるイラストコーナーは豊富な視覚資料を通じてその変化を紹介している。景観から読み取れる、この地にススメられてきた労働の空間的な編成はまさに「社会的差別が刻印されたディープな都市図」¹⁾といったディープサウスの名称そのものであるが、それはこの地が孕んでいる様々な様態を読み取るためのスタートラインに過ぎない。まずはその場面と目に見えるはずの風景とをクロスカッティングするように頭の中で映してみることからディープサウスに一步入ってみるのだ。

一步入ったまちで見えてくるのは人間である。第1章はその当事者の生活の一部に入ってみる貴重な体験を提供しながら読者に想像するように語りかける。朝早く文字通りの「労働市場」に出かけ、作業に必要な服装や道具を揃えて肉体労働がメインのシンプルな時間割に組み込まれる日常に沿って歩く。現在の労働の姿は、昔の記憶話からより鮮やかに提示される（第2章）。ここで見逃してはいけないところは新幹線を走らせる電力を作ったことを誇らしげにいう釜のおっちゃん（97頁）たちから読み取れる彼らの日常と都市の建造環境との間における逆説的な場所感覚である²⁾。ここで改めていうまでもなく、日雇い労働者たちの労働条件は厳しいものである。それでもそのような営みをやり続ける一つの喜びである「みんなのため」という意識で、自らの身体の労働から「都市構造」をつくり出すという恐ろしい場所感覚は、自らが生活する身体と都市計画に関わる政治のローカルからグローバル経済へ広がるスケール感覚（ハーヴェイ、1999）が、国民という集団の感覚を通して連動されるプロセスを示している。この場合の悲劇なところは「原罪」という宗教的説明のほうが適しているのかもしれない。実際、その至難の状況から脱するには罰としての身体的・構造的抑圧が必要であった。日雇い労働システムの維持にはピンハネや暴力の行使という強制的な手段が欠かせないものだから。その強いられた条件に対してより公に浮上するのが本書のなかでは「暴動」である。1961年に初めて火がついた暴動は、1970年代まで続きながら釜を外からの活動家や支援者につなぎ合わせ地

域内に働く制度や共同の場—セーフティネット—を作り上げるうえで大きな役割を果たした。釜が90年代に入って「福祉のまち」と化した土台になったそれを第7章の著者で編集者の一人の原口は「地域文化」を成す自律性として提示している。

しかし原口が本書と関連した別の報告で自律性としての「逃亡」に注目していることと同様の意味で³⁾、筆者は本書に直接書かれていないまま強烈に浮かび上がっているある事象についてどうしても目を外すことができない。その地域文化は表現されていないながらも本書の所々から湧き出るように表れる。寄せ場化して以来、釜には「女」が不在なのである。恐らくこれが釜を含むドヤ街と、他のスラムとの間の最大の差異だろう。ここで思い浮かぶのは、在日1・2世の女性が置かれた歴史的な境遇である。在日の女性—「オモニ（お母さん）」—は在日の有する社会的差別と貧困のうえに、家庭内における重層的な差別を被る存在でありながら、家計を切り盛りして子供を育てる動的存在としても注目される。これは別の方向から考えると、抑圧される女性の存在こそがスラム・貧困層の定着と共同性を生成・維持するセーフティネットを成していたということである。ここでさらに第2章とコラム「老」で強調された「無縁仏」という言葉を思い浮かべてほしい。「無縁仏にならずにすむ」(92頁)と、釜で活動する意味を語る日雇い労働者の言葉は、それが過去のルーツのなさだけではなく、未来へのルーツのなさに対するもどかしさだということを気付かせる。釜のおっちゃんたちはオモニとしての女性の不在のうえ、子宮が取り除かれた労働を強いられてきたのである。コラム「酒」でピックアップされたアルコール依存症、そして森崎和江が弟の死や「からゆきさん」を通じて描いた少年少女の絶望がここで共鳴する。男のまちであるはずの釜が、上述したように都市の建造環境の下支えとなった極めて非男性的な労働＝都市文化の様子としても読み取れる。そう考えると、釜で福祉や宗教やアート（コラム「芸」）によって担われるセーフティネットは女性に取って代わるものとして機能しているのかもしれない。90年代以後の釜に新しい人口が流入している事実は、「釜ヶ崎の全国化」と言われる格差社会の産物のみならず、暴動から運動、運動から制度と実践へ繰り広げられたセーフティネットの構築の故であろう。

ここでふたたび編者たちの言葉に戻ってみたい。「おわりに」に示されているように、本書が企画されたのは90年代後半から現れた釜ヶ崎のまちづくりの動きに現場で携わってきた研究者たちによってであった。「スラム化する大学」(村澤, 2010) までには言わないとしても、

この時期はネオリベ的な経済論理が大学の研究環境まで広まっている時期でもある。非正規雇用を前提にしたプロジェクト化する研究という近年の動向を考えると、釜の現場は、研究することで自らの身体を再生産不可能にさせる場所感覚の乖離を現実的なものとして我々の目の前に提示する。その意味で、釜ヶ崎を知ることとは、閉ざされた地域を知ることを超えて、地域を成している様々な構造と実践を熟知し自らの、また様々な社会構成員が置かれた様々な空間的構造の複雑な絡まり合いを読み取るための端緒に出会うことである。かつて「釜ヶ崎」という物質かつ名称に結びつき、物質との距離を遠ざけていた政治（たとえば180頁などから見られる集団的記憶の作用）から離れ、社会を貫く類似性を見つけ出し、ほかのところからそれを引き出すということ、それはむしろメタファー、詩に近い感覚かもしれない。酒井(2011)⁴⁾や櫻田(2012)⁵⁾が遊歩して書き下ろしたディープサウスの、それとつながった地下水脈が隠れる大阪のように。

戦争と地方が交差する貧困の土台から落ちこぼれて流れた男の子たちは、釜にたどり着く。そして西の港湾、水路やらダムやら電気やらの都市に流れる線と脈、橋や道路や地方の片隅の「道」^{アスファルト}を拓きながら点々と移動してはふたたび釜に戻ってくるのだ。無数の線をつなげて帰った子供たちを迎えるのは家計を維持するお母さんでも、一緒に戦うつれあいでもない。ただルーツからリネージへ、垂直的で単線的な性の所有としてつながるはずだった命から、共有としてひろがる複数の線の間を水平的に「ハシゴ」(308頁)する。命をかけた水平的移動が織物へ化するいくつかの刹那の瞬間を、この1冊は収めている。

注

1. 吉村智博「被差別民と“大大阪”一部落と寄せ場の歴史像」『現代思想』40(6), 2012, 139-149頁。同号は特集＝大阪で取り組まれ、本書の筆者も多数掲載している。
2. ここで場所感覚とは地理的スケール(scale)を指す。地理的スケールについては、以下の論考などを参考。山崎孝史『政治・空間・場所—「政治の地理学」にむけて』ナカニシヤ出版, 2011。MacKinnon, D., Reconstructing scale: Towards a new scalar politics, *Progress in Geography*, 35(1), 2010, pp21-36.
3. 2012年7月28日人文地理学会第110回地理思想研究会於大阪府立大学中之島サテライト「ディープサウスからの都市空間論」における同氏の発表「移動と逃亡の地理学に向けて」より。
4. 酒井隆史『通天閣—新・日本資本主義発達史』青土社, 2011。
5. 櫻田和也「ポストモダン都市における唯物論の詩学・試論」『現代思想』40(6), 2012, 210-219頁。